埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

最後期インタールードに見る演劇的スペクタクル

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-07-28 キーワード (Ja): キーワード (En): Robert Wilson, London, Interlude 作成者: 米村, 泰明 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/850

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

最後期インタールードに見る演劇的スペクタクル

Dramatic Performance in the Later Interlude

米　村　泰　明
YONEMURA, Yasuaki

はじめに

Robert Wilsonの*The Three Ladies of London*（『ロンドンの三淑女』以下『三淑女』）は1581年に製作され、1584年と1592年に出版されている。この作品は、舞台をロンドンに限定し、排外主義を彷彿とさせる国家意識のもとで、アレゴリカルな登場人物が都市における生活に密着した魂の争奪戦に関わっていく。タイトルロールの三人の淑女、Lucre（「金銭」）、Love（「愛」）、Conscience（「良心」）は経済都市ロンドンを象徴する属性である。従来のモラリティー／インタールードにおいても堕落の源であった「金銭」によって、美徳のアレゴリーであった「愛」「良心」までもが堕落し、獄舎につながれるというこれまでにない展開をみせる。従来のモラリティーが「万人」として描いたHumanum Genusに該当する登場人物としてはSimplicity「単純」がいるが、彼の魂に成長があるとしても[1]本作においては経済都市ロンドンこそが悪徳と美徳の争奪戦の対象となっているといえるだろう。都市が内包する悪徳と美徳のせめぎ合いを描く作品となっているのである。その描写方法に様式化されたビジュアル性をふんだんに取り入れているところに特徴が見られる。[2]

『三淑女』から７年後の1588年に、同じ作者がその続編とも言うべき*The Three Lords and Three Ladies of London*（『ロンドンの三貴族と三淑女』以下『三貴族』）を製作し、1590年に出版されている。獄舎につながれた三淑女が、ロンドンの別の属性である三人の貴族、Policy（「政策」）、Pomp（「栄華」）、Pleasure（「快楽」）との結婚により救済されるプロセスに、対スペイン戦争のエピソード、さらには同国内の別の都市リンカンの三人の貴族との対決を織り交ぜている。三人の貴族は、従来の作品では悪徳に擬せられる存在である。この作品は、前作を超えるビジュアル性を持ち、イングランドの歴代王朝やロンドン市の統治者たちが権威の発揚のために行ってきた、Royal EntryやMidsummer Watchなどの演劇的パフォーマンスを取り入れている。宗教改革の余波が演劇というジャンルにも及んでいたこの時代に、従来のモラリティー／インタールードには見られない要素を持った作品が生み出されたことは興味深い。

本稿は、特に『ロンドンの三貴族と三淑女』のビジュアル性に焦点を当てて、最後期インタールードの生き残り戦略の一端を読み解く試みである。

キーワード：ロバート・ウィルソン、ロンドン、インタールード
Key words ：Robert Wilson, London, Interlude

モラリティー／インタールードの変遷の概略

まず、『三淑女』『三貴族』に至るモラリティー／インタールードの変遷を概観する。

アレゴリーを用いたモラリティー／インタールードの時系列による変遷をSpivakは次のように述べている。(3)

初期のモラリティーはいわゆる‘full scope morality’と呼ばれるもので、終末論がその根底にあり、現世と来世における魂の永遠性の分析を行ったものだった。（作品としては*The Castle of Perseverance*（『堅忍の城』1405- 1425年頃）や*Pride of Life*（『生の驕り』14世紀末）が該当する。両作とも作者不詳。）1500年以降になると、人生のより限定された局面における、特定の問題を扱うようになった。このあたりから主人公はHumanum Genusであることをやめ、限定された視点から描かれる人間となった。（たとえば*The Nature of theFour Elements*（『四元素の性質』Joh Rastel 作、1517年頃）のHumanityは知識の追求に携わり、*A Satire of the Three Estates*（『三階級の風刺劇』David Lidnsay作、1540年）のRex Humanitasは国王としての人間である）このような主人公が直面する問題は、Christianityそのものに関わる魂の問題ではなく、宗教の問題が扱われるときには、それはセクトの問題となっていた。また家庭や家族に関わる問題、教育問題、若者の非行、そして、国家の統一や安全に関わる政治的、社会的、経済的問題などの、個別の視点、言い換えれば、形而上的な関心から、形而下の救済へと逸れていったのである。中世とルネサンスを分けるものは世俗化であるとSpivakは言う。

新しい都市生活にあっては、権威のありかがChristianityではなくなってくるのは必然であるとも言えるだろう。人文主義の広がりもあって、新しい権威は古典，哲学へと移行した。これまでは聖典から引用されていた拠り所となる権威は、後期の作品では異教の古典、外国の哲学者たちの言葉となった。さらに西ヨーロッパから、騎士道、ロマンチックな愛のモチーフが流入してくる。（これと教育に関する問題を混交した作品が*The Marriage of Wit and Science*（『知恵と学問の結婚』作者不詳、1569年）その結果、キリスト教的なアレゴリーは消滅へと向かったのである。

Sarah Carpenter　は商業劇場の出現を衰退の原因の一つとして捉えている。旅回りの劇団のレパートリーの限界である少人数で単純な筋立てにならざるを得ない教訓や宗教的・道徳的関心に向いているモラリティーよりも、商業劇場で演じられる大掛かりなスペクタクル性を持った派手な演出を求めるようになったというのである。(4)

宗教改革の影響

ジャンルを巡る問題だけではなく、演劇そのものを巡る社会的な動きもあった。主要な要因としては宗教改革があげられる。

宗教改革による僧院の解散や付随する図書館の破壊に伴って消滅したSaints Playsのテキストは多くに上った。サイクル劇などに見られるマリア劇は反カトリックの標的となり、多くの改変や削除が行われたし、従来のカトリック的要素の強いモラリティー／インタールードの個別の作品が描く内容にも大きな影響を及ぼした。(5) ヘンリー八世統治下の1543年に成立したAct for the

Advancement of True Religionでは論争のために聖書を演劇に利用することが禁止された。1559年にはエリザベスが「国王至上法(Act of Supremacy)」を再発令、「礼拝統一法(Act of Uniformity)」を成立させた。礼拝統一法では宗教や国家の重大事は権威ある有識者によってのみ行われるべきであり、大衆相手の演劇の関与するものではないと決められた。この法律の制定によって、宗教上の論争を扱ったインタールードやサイクル劇、カトリック的なモラリティーは終焉を迎えたのである。しかしながら、モラリティー／インタールードは宗教改革の荒波を乗り切る柔軟性を内包していた。Norlandはモラリティーを、観客の一人一人に語りかけ、個人と神の関係、死後の魂の運命に焦点を当てるものと定義する。ジャンルとして聖書的・歴史的モデルに縛られていないので、アレゴリーを自在に用い、教訓のために登場人物を視覚化することができたのだ。その結果従来の宗教上の問題ではなく、社会的・経済的な問題、国家意識の高まりとともに外国との関係が日常生活に与える様々な悪影響を批判的に展開することで、演劇のジャンルとして生き延びたのである。(6)

宗教改革は演劇の内容にまで国家権力が介入するという事態を招いたが、それは演劇が政治的、宗教的な問題の一部となったということでもある。演劇を教育の重要な道具とする風潮すら芽生えた。演劇という存在が、社会的に持つ影響力の強さに支配層の関心が向いたと言ってもいいだろう。(7)

演劇あるいは演劇的パフォーマンスは古来から権力の示威行為の一環として行われてきた。イングランド最初の中央集権体制を確立したといわれるチューダー朝に限ってみても、権力の存在を国内外に誇示するために、壮大なスペクタクルを上演している。1501年のアーサー皇太子（後のヘンリー八世）とアラゴンのキャサリンの結婚式や、1509年のヘンリー八世の戴冠式に続いて繰り返されるヘンリーの再婚のたびに、あるいは、外国からの国王や賓客をもてなす催しに、ロンドン市内を練り歩く壮麗な行列とそれに付随する舞台上での演劇的スペクタクルには手の込んだ工夫がなされ、多くの予算がつぎ込まれたのである。(8) ロンドン市も同様に、新しい市長が選出されるとその祝宴と権力誇示のために盛大なパフォーマンスを繰り広げた。ロンドン市は劇場が怠惰の原因となったり、疫病発生の際には拡大の原因となるという理由で1545年に市内でのインタールードの上演を禁止したし、1573年からも市内での上演禁止令が相次いでいる。これに対して政府からは規制の緩和あるいは特別措置を求めての働きかけが行われた。1574年にはロンドン市が商業演劇に厳しい内容の条項を定めたため、最初の公設劇場であるThe Theatreはロンドン市外に建設されることになった。演劇好きだったエリザベスの宮廷と、演劇に嫌悪感を抱くロンドン市には軋轢があったのである。プロテスタントとして演劇を危険視しながら、一方では演劇的パフォーマンスを権力の示威行為として利用するという、構造はチューダー政権とロンドン市の双方に見られるのである。(8)

プロテスタント勢力が演劇を危険視したのは、神の言葉を劇化するという行為においてである。神の言葉は聖職者による説教によって、何も付け足されず、何も引かれずに大衆に伝えられるべきものであり、舞台の上で、しばしば野卑な言葉を用いながら、余計な言葉や解釈を付け加えられて演じられるべきも

のではないとされていたのだ。特に1570年代からはカトリック的な偶像に対する恐怖感（iconophobia）が顕著になったが、それは演劇の持つ「視覚に訴える」影響力の故であった。(9)

プロテスタント側から社会のあり方へ強烈な批判を展開したPhilip Stubbsの*The Anatomie of Abuses*の一行、‘what thing we see before our eyes, do pearce further, and printe deeper in our harts and minds than that thing, which is hard onely with the eares’「目に見える事柄は、耳で聞く事柄よりも深く心と記憶に染み通り、より深く刻印される」がそれを如実に表している。(10)

『三淑女』について

Robert Wilsonは1583年に女王のための芝居を上演することを目的として結成されたThe Queen’s Men（女王一座）の創設メンバーの一人である。この一座の創設の理由の一つは、女王を中心とした絶対主義国家というイメージ作りだったと考えられている。(11)

７年間の間隔を置いて書かれたこの二作品をおけるビジュアル性に注目する事によって、モラリティーあるいはアレゴリーが演劇作品における表現形式として生き残りをかけた戦略を読み解いていきたい。

本稿で取り扱うのは続編とも言える『三貴族』に見られるビジュアル性であるが、それは三淑女を奪うことによってイングランド制圧をもくろむスペインの三貴族との争い、さらにはリンカンの貴族との対決に付随するものなので、まず『三淑女』の概略を述べておかねばならない。

『三淑女』はロンドンの属性をアレゴリカルに象徴する三人の女性「金銭」「愛」「良心」の転落を描いている。物語の開始から、人々に讃仰される「金銭」は奸計を用いて「愛」と「良心」を堕落させることに成功するが、最後には悪事が露見し自らも法の裁きを受けることになる。『三淑女』は彼女らがそれぞれ判決を受け獄につながれる場面で終わる。

ロンドンの悪徳を統率し、姉妹である「愛」と「良心」を堕落させるべく動くのは「金銭」である。(12)従来のモラリティー／インタールードでは「金銭」は人間の属性の一部として描かれて来た。しかしこの作品では、「金銭」は外国からイングランドに入ってきたものであり、それがカトリックおよび異教の外国からの崇拝を集めているという点に特徴が見られる。当時のイングランドに高まっていた国家主義と排外主義を象徴する存在となっている。(13)

反カトリックの姿勢は「金銭」に付き従う悪徳の中でも「聖職売買」がローマの出身であるところに見られる。ロンドンにおける金銭欲による腐敗、根強く残るカトリック側の反撃を外国からの侵略の一部として観客に認識させようと言う姿勢が顕著に見られるのだ。

従来のモラリティー／インタールードにおいては、「金銭」は明確に悪徳と断罪できる存在だった。しかし、現実のロンドンにおいて、金銭はもはや単純に悪徳のシンボルとは受け取られない。チューダー王家が国家の経営においてロンドンの財力に頼る状況のもとでは、「金銭」は個人においても、都市および国家においても生存に不可欠なものになっている。(14)「金銭」そのものは悪ではなく、その使用方法さえ間違えなければきわめて強力な善になりうるものなのである。『三淑女』は、「金銭」の使い方を間違えた都市の不幸を描いているのである。

アレゴリカルな存在として従来のモラリティー／インタールードに登場してきた「愛」と「良心」も、『三淑女』においては生活者として描かれる。[15] ロンドンでは、「愛」も「良心」も世俗的な活動から無縁の存在ではない。生活のためには金が必要なのである。しかし、彼女らの特性上、経済的に非力であることは致し方ない。「愛」の敗北と堕落を決定づけるのは「偽装」との結婚であるが、これも『金銭」の策謀の結果の貧困がもたらしたのである。

従来のモラリティー/インタールードでは主人公を支え、悪徳と対峙する美徳であった「良心」も、本作では「愛」とともにロンドン居住者から見捨てられ、また、悪徳に対してもなんらの道徳的指導もできない無力な存在となっている。[16]「良心」は高額な家賃を払えずに家を明け渡すことになる。社会批判を行うインタールードには、高い家賃を払う外国人の流入によって家賃が高騰し、住居を追われることになるのはロンドンの職人たちが登場する。「良心」もその一員となっているのである。彼女は虚偽を当然とする商人にあふれたロンドン社会を嘆き、人里離れた場所で物乞いをして暮らしていこうと決意するが、貧困に疲れ果て「金銭」の軍門に降る。商業都市として貪婪なまでの発展を見せるロンドンにあって、現実に力を持つ「金銭」にとって「良心」などとるに足りないものになったのである。

この三人がロンドンという都市を象徴し、ロンドンがはらむ問題意識を代表させる存在になっていることが重要である。genericな人間の魂を美徳と悪徳が争うモラリティーのパターンは、ここに来て、ロンドンという国家を代表する都市の美徳と悪徳が、国内の、そして海外からの悪徳の攻撃を受けるという新しい段階に入っているのである。

『三貴族』について

『三淑女』の結末では、「金銭」「愛」「良心」がそれぞれに堕落し、「金銭」と「愛」は裁判の結果地獄落ちを命じられ、「良心」は裁判を待つことになる。そして、彼女たちを堕落させた悪徳は罰せられずに逃げおおせた。このような従来のモラリティーの構成から逸脱する結末を、そのままにしておけなかった作者が、三淑女が救済される物語として書いたのが『三貴族』であると言われている。[17]

主人公の「政策」「栄華」「快楽」は従来のモラリティー／インタールードであれば悪徳の側に立つ名称だが、本作品ではロンドンの政治力、栄華を託された存在である。[18]

三貴族はロンドンという都市が機能するために必要な役割を担っている。彼らが三淑女に求婚するのは、三淑女が地獄と牢獄に幽閉されたロンドンの窮状を救うためである。特筆すべきは彼ら三人全員が「金銭」との結婚を望んでいることである。それぞれが象徴するロンドンの機能を従前に働かせるためには、なによりも財力が必要であるという信念は、経済都市ロンドンの拠って立つところを明確にしていると言えるだろう。

ロンドン対スペイン

本編の焦点はロンドンの三淑女を狙うスペイン貴族との戦いである。スペインの三貴族の襲来を告げる「勤勉」の描写は無敵艦隊の来襲を想起させ、それに備えるロンドンの三貴族の発言内容は、大国スペインへの対抗意識とイングランドの国家意識をいやがうえにも盛り上げる。ロンドンにはびこる悪徳とス

ペインの関連が強調されるエピソード（ロンドンにいづらくなった悪徳たちは「高利貸し」を除いて船で悪徳が受け入れられているスペインに亡命する）を挟んでスペイン貴族との対峙の場面となる。このスペイン貴族との戦いこそ本作で最もビジュアルな場面である。前哨戦とも言える両国の貴族たちの名乗り合いこそ仰々しい台詞を用いて行われるが、実際の戦いの場面はきわめて様式的な所作によってのみ行われる。

スペイン貴族が逃亡した後､｢金銭｣さえもが、私的な喜びよりも国家の利益のためにロンドンの三貴族との結婚を受諾する

続いてリンカン市の三貴族がロンドンの三淑女に求婚に来るが、彼らはいとも簡単に撃退される。リンカン側の敗北の理由は、相手がロンドンであったというだけのことである。ロンドンの三貴族は、ロンドンという言葉を頻繁に用いる。都市としての規模、経済力の違いだけでリンカン側は敗退するのである。スペインという強国に勝利したロンドンにリンカンが太刀打ちできるはずはないのである。

ロンドンの三貴族と三淑女の結婚により、ロンドンは救われる。しかし、本作の結末において､｢詐欺｣と「偽装」はロンドン経済界に潜んだままとなる。彼らのような詐術の経済社会からの追放が不可能であることは、もはや経済がキリスト教的倫理観だけでは働かないことを示唆しているのである。

この２作で三淑女の堕落から救済へと至るモラリティーの構成が出来上がるのだが、堕落からスペインに対する勝利を経て救済されるのは実際には「ロンドン」である。スペインとの戦いが、イングランドの貴族ではなくロンドンの貴族によって遂行されることからも明確なように、ロンドンは都市の一つではなく、イングランドの栄光そのものを代表する存在として描かれているのだ。

『三貴族』のビジュアル性

『三貴族』はロンドン市を表象する女性の口上で始まる。擬人化されたロンドンの前には二人の天使がおり、後ろには光り輝く剣を携えた二人の天使が控えている。このロンドンの女性像は、従来のモラリティー／インタールードに登場する寓意的人物というよりも、Royal EntryやLord Mayor’s showに見られる擬人像と理解すべきであろう。[19] 三人は盾を持つ従者を従え、盾には紋章と題銘が刻まれている。ト書きは次のように指定している。

> Enter the three Lordes and their pages: First, Pollicie with his page Wit before him, bearing a shield: the ympreze, a Tortoys, the word, Prouidens securus. Next Pompe, with his page Wealth bearing his shield, the word, Glorie sauns peere: the ympreze a Lillie. Last, Pleasure, his page Wil, his Ympreze, a Faulcon, the word, Pour Temps: Pol. attired in blacke, Pompe in rich roabes, and Pleasure in collours. (B)

「政策」の紋章は亀であり題銘は「神の恩寵に揺るぎなし」。亀は固い甲羅で外敵から身を守り、他の助力を必要としないことの象徴である。後にスペイン貴族との戦いを統率することになる｢政策｣にふさわしい。｢快楽｣の紋章はハヤブサであり題銘は「時のために」。高く舞い上がったり、地を這うように低く飛ぶことが｢快楽｣と同様である。｢栄華｣の紋章は百合の花であり題銘は「比類なき栄

光」。百合の比類のない美しさと栄光を示すためにソロモンの言葉を引用している。同じ説明が1634行以降のスペイン貴族への紹介でもなされている。[20]

このビジュアル性は、スペインの三貴族との対決の場面でも強調されている。スペイン側の三貴族Pride（「傲慢」）、Ambition（「野心」）、Tyrannie（「暴虐」）も、ロンドンの三貴族に劣らぬ出で立ちである。彼らが登場する際には、ロンドンの三貴族と同様の卜書きで衣装、盾、紋章と題銘の説明がある。

スペイン貴族の様子は次のように指定されている。

> Enter first Shealty the Herald: then Pride, bearing his shield himself, his ympreze, a Peacocke: the worde, Non parilli, His Page Shame after him with a Launce, hauing appendent gilt, with this word in it, Sur le Ciel, Ambition his ympreze, a blacke Horse salliant, with one hinder foote vpon the Globe of the earth, one fore foote stretching towards the cloudes, his woorde, Non sufficit orbis: His page Treacheie after him, his pendent Argent and Azure, an armed Arme catching at the Sun beames, the woorde in it, Et glorian Phoebi. Last, Tyrannie, His ympreze, a naked Childe on a speares point bleeding, his woord, Pour sangue, His page, Terrour, his pendent Gules, in it, a Tygers head out of a cloud, licking a bloody heart: The woord in it, Cura Cruor. March once about the stage, then stand and viewe the Lords of London, who shall martch towardes them, and they giue backe, then the Lords of London wheele about to their standing, and th'other come againe into their places, then Pollicie sendes Fealtie: their Herraldes coate must haue the armes of Spaine before, and a burning ship behind. (Gr)

三人の貴族はそれぞれ格言付き標章で飾られた楯を有している。Prideの格言付き標章の絵柄はクジャクであり、題銘はNon parilliである。Ambitionのそれは後ろ足を地球に乗せて、前足は雲にも届こうという黒い馬と、Non sufficit orbisである。Tyrannieの絵柄は槍の穂先で血を流す赤子であり、題銘はPour sangueとなっている。高慢な美しさ象徴するクジャクと、「我に比肩する者なし」という題銘は「傲慢」を名前に持つPrideにふさわしい。世界を制覇してもなお物足りなさを感じるであろう「野心」、残虐な流血を好む「暴虐」もそれぞれにふさわしい寓意を込めた絵柄と題銘を与えられている。これが「モグラ塚の如き小島」（1660行）とイングランドに鎧袖一触の気概を見せるスペインの強大さを寓意として語っているのである。

彼らの戦いの様子も、きわめて様式化されたものとなっている。スペインの貴族の到来を知った三貴族の一人Policyが、三人のスペイン貴族がロンドンの三淑女に求婚に来たことを知ったとき、彼らを迎え撃つべくあらゆる演劇的スペクタクルを用いるようにとPompとPleasureに命令する。

> Lord Pomp, let nothing that's magnificall, / Or that may tend to Londons graceful state / Be vnperfourm'd, as showes and solemne feastes, / Watches in armour, triumphes, Cresset-lightes, / Bonfiers, belles, and peales of ordinance. / And Pleasure, see that plaies be published, / Mai-games and maskes, with mirth and minstrelsie, / Pageants and school-

feastes, beares, and puppit plaies, / My selfe will muster vpon Mile-end greene, / As though we saw, and fear'd not to be seene:

(1319-23行)

'showes and solemne feastes'はおそらくLord Mayor's Showのことであろう。毎年選出されるロンドン市長の就任宣誓式に伴う催しであり、13世紀には記録が残っている。[21] 16世紀半ばにはMidsummer Watchと並んで、ロンドンの二大見せ物になっていた。ロンドンのギルドホールを出発して、テムズ川を船で渡り、ウェストミンスターで国王またはその代理の前で宣誓式を行い、逆の経路でギルドホールへ戻るのであるが、音楽や旗指物、着飾った参列者たち、さらには山車なども引き出される、大掛かりな見せ物になっていた。[22]

'Watches in armour'はMidsummer Watchであろう。本来は治安と軍事訓練のために行われていたもので、12世紀ころから始まり1540年代までロンドンの大掛かりな見せ物になっていた。ロンドン市内を武装したlivery companyのメンバーや、松明持ち、楽隊、さらには機械仕掛けの巨人や悪魔たちが練り歩き、人足たちに担がれた木とカンバスの山車も加わっていたようである。この移動式パジェントの上で、主に聖書のエピソードや古典的な神話やアレゴリーを上演していた。[23]

Policy 本人は「Mile-end greene に陣を敷く」と言っている。この地名は、John Stowの*Survey of London*にも言及されており、1539年、ヘンリー八世の時代に大規模なMidsummer Watchが行われている。[24]

スタブスをはじめとするプロテスタントに厳しく批判されていた演劇であるが、『三貴族』においては、それがスペインを撃退するための武器として扱われている。このような演劇的催し物の上演を、スペインの貴族たちに対抗する最も有力で不可欠な武器としてPolicyが認識しているのは、これらが持つ濃密な祝祭性にあるのだろう。ロンドンの演劇的催し物が、仰々しく着飾り様式性を前面に押し出してイングランドに侵攻するスペイン貴族に劣ることは、すなわち敗北を意味するのである。

それぞれに付き従う従者も同様に寓意を有する槍やペンダントをきらびやかに見せびらかしつつ、舞台を一周し、ロンドンの貴族を一瞥する。ロンドンの三貴族はスペイン貴族に向かって前進し、次いで後退しみずからの戦略的位置を占める。次いでスペイン貴族側も舞台に位置を占め、両軍が対峙することになる。

舞台上での前進、後退、対峙は台詞を用いずに、所作だけで行われる。ロンドン側とスペイン側の言葉を用いてのやり取りに続く、戦闘場面も同様に様式化された所作だけで行われる。戦いの場面のシークエンスは以下の通りである。

Let the three Lordes passe towards the Spaniards, and the Spanirdes make show of comming forward and sodainly depart. (G4r)

スペイン側が逃げ出すのを見て、ロンドンの三貴族は勝利の印に楯を掲げる。

They hang vp their shieldes, and step out of sight. The Spaniardes come and flourish their rapiers neer them, but touch them not, & then hang vp theirs which the Lords of London perceiuing, take their owne and

batter theirs: The Spaniards making a litle showe to rescue, do sodenly slippe away and come no more. (H)

このような様式性は、無言の仮面劇や「主題付き馬上武術試合」に通じるものがあるのかもしれない。[25] 単なる前進と後退が激しい戦闘を想起させるのはバレーを見るようでもある。ロンドンの三貴族が残しておいた楯に突進するが触れることのできないスペインの三貴族の姿は騎士道物語において敗北する騎士の姿そのものである。

勝利を収めた三貴族は、勝利を記念してあらゆる種類のフェスティバル、パジェントを催すと宣言する。

With pageants, plaies, and what delights may be to entertaine the time and companie.
(1901行)

チューダー朝政権が政権維持のためのイメージ作りに利用して来た演劇的パフォーマンスが打倒スペインの武器となり、勝利を祝う催し物となっているのである。プロテスタント勢力による劇場批判の高まりや、劇場を巡るロンドン市との対立などの社会的背景を考えると、演劇などのエンターテインメントこそ国を守る強力な武器なのだという「政策」の発言は、女王一座の役割の大胆なマニフェストであるようにも思える。

結　論

『三貴族』で言及される社会的、経済的、そして対外的問題はすべて1580年代のロンドンの現実であった。そして、それをモラリティー／インタールードの枠組みの中で描いた。『三貴族』の「政策」も「快楽」も「栄華」も、伝統的なモラリティーで与えられていたアレゴリカルな役割に大きな変化が起きていた。精神世界を描いていたモラリティーが、現実の社会を描くようになったとき、殊に舞台がロンドンというイングランド随一の経済規模を政治力を誇る都市になったとき、これらの役名に込められた寓意は、従来の悪徳という枠組みを抜け出し、現実の世界を動かす原動力となっていたのである。女王一座にとって最も重要なレパートリーはイングランドの歴史劇であったとするならば、[26] Wilsonにとって、アルマダ撃破はエリザベス統治の最も輝かしい歴史の一場面であったであろう。Wilsonはそれを言葉ではなくビジュアルを持って提示した。最も重要な場面を無言の様式化された所作だけで演じさせた作者は、国家の権威発揚の道具としての演劇的スペクタクルの有効性を理解し、それを演劇作品において利用することにより、衰退の道を辿っていたインタールードに最後の生き残り戦略を与えたのだと言えるのである。

注

（1）前作に続いて狂言回し的役割をつとめる「単純」は、本作においても悪党達に騙される役柄であるが、最後には国家に害悪をもたらす鉄の取引（武器を作るために用いられるので危険）、金銀の取引（泥棒に狙われるので危険）、そして奢

侈製品の取引（人に見せびらかしたくなるという害）の３つの取引を禁止するように提言するという社会批判者に成長する。「単純」の提言は庶民の立場からのきわめて素朴なもので、三貴族に受け入れられるものではないが、このような登場人物にも国家意識が芽生えていることを伺わせるものとなっている。

（２）Sarah M. Carpenter, *Allegory in the Theatre*, (D.Phil) 1979. pp.218-29

（３）Bernard Spivak, S*hakespeare and the Allegory of Evil*. Columbia UP., 1958. pp.206-250.

（４）Sara Carpenter, pp.205-208ただし、モラリティーは時代遅れとなり、人気も減少していったが、シェイクスピアの『リチャード三世』にも言及されているように後世の観客にも説明抜きで理解できる身近なジャンルであり続け、17世紀までモラリティーへの親近感は続いたと述べている。

（５）四大サイクル劇のすべてが聖書にはないマリアの被昇天や戴冠のエピソードを劇化している。宗教改革により、まずタウンリーとチェスター劇から削除され、ヨーク劇からも「国王至上法」から14年後に禁止された。1557年にいったんカトリックのメアリが即位した後にはカトリック信仰の復活とともにマリア劇も再開されたが、死後には禁止されている。

（６）Howard B. Norland, *Drama in Early Tudor Britain 1485-1558*, U. of Nebraxka P.,1995, pp.129-130.

（７）Norland p.40.

（８）有路擁子/成沢和子、『宮廷祝宴局　チューダー王朝のエンターテインメント戦略』松柏社、2005年、2- 33頁。およびRoy Strong, *The Tudor and Stuart Monarchy*, 2vols. The Boydell Press, 1995.『ルネサンスの祝祭』（上下）星和彦訳、平凡社、1987年。Anne Lancashire, *London Civic Theatre*, Cambridge UP., 1989, pp.109-170およびpp.185-194

（９）P.W. White, *Theatre and Reformation*, Cambridge UP.,1993, pp.166-170

（10）Philip Stubbs, *The Anatomie of Abuses 1583*, theatrvm Orbis Terrarvm, 1972.

（11）『宮廷祝宴局』186頁。またScott McMillin and Sally-Beth MacLean, *The Queen's Men and Their Plays*, Cambridge UP., 1998. pp.16-17では、優れた役者を集めることと、秩序維持のために演劇讃仰の規制を行うという二つの理由を挙げている。『三淑女』を書いた当時、WilsonはLeicester's Menに所属していた。Leicester伯はイングランドの安全と国内外でのプロテスタンティズムの普及にあったこが作品の内容に繁栄していると言えるだろう。Scott and MacLean, pp.22-24.

（12）金銭欲をテーマとした、あるいは、モチーフとして持つ作品には*Impatient Poverty*（『いらいらする貧乏』作者不詳　1547年頃）、*The Trial of Treasure*（『富の試み』W. Wager作とされる。1567年出版）、*Liberality and Prodigality*（『寛大と放蕩』作者不詳　1567頃）、*All for Money*（『金がすべて』Thomas Lupton作　1577頃）などがある。いずれも神学的なテーマではなく社会的なテーマを持った現世における利益追求による社会の腐敗を描く作品である。これらの作品でも腐敗の視覚化の試みは行われている。たとえば『金がすべて』においては、舞台上で「金」が「快楽」を出産し、「快楽」が「罪」を生み、「罪」が「地獄堕ち」を生み出すビジュアルな場面が展開する。

（13）「金銭」自身から自己紹介の形で祖母が商業都市ヴェニスにいたことが述べられ、（279行）ヴェニスで「金銭」の祖母に仕えていた「高利貸し」がイングランドに来たことについて、彼は「娘の「金銭」のほうがずっと優れているとヴェニスの「金銭」から聞いた。また「金銭」が住むにはイングランドは世界のどこよりも適切である。」と述べている。このような台詞は、ロンドンが内包する悪徳が外国生まれであることを示唆することによって、政府の対外政策を支持しようとする現れであろう。イングランドの国家意識の現れである。「金銭」の崇拝者は「イタリア、バーバリ、トルコ、ユダヤ、そしてPagan himself（マホメット）」からイングランドに来ていることが異教との関連づけを明確にしている。（19- 20行）

（14）たとえばこの作品にも登場するRoyal ExchangeをSir Thomas Greshamがロンドンに建設したのは1566年から68年にかけてであるが、エリザベスがRoyalの名称を許したのはロンドンの経済力に

頼っていたことが理由であった。ロンドンはイングランドの司法と行政の中心であったが、それにもまして、その経済力がロンドンの存在を無視しえないものにしていたのであった。Janette Dillon, Theatre, *Court and City*, 1595-1610. Cambridge UP., 2000. pp.28-29.

(15)「愛」が登場するモラリティー/インタールードは多くはない。同名のLoveは*The Life and Repentance of Mary Magdalene*（『マグダラのマリノアの生涯と悔い改め』Lewis Wager作、1558年）に登場する。この作品の最後に登場する「愛」は、あくまでも信仰の結果生じるキリスト教的なものである。それ以外の作品では、肉欲を表すものとして*Youth*（『青年』作者不詳、1514年）とに『三階級の風刺劇』に「好色」が、断片ではあるが*Love Feigned and Unfeigned*（『偽りの愛と真の愛』作者不詳、1550年）にタイトルの二人が、*The Most Virtuos and Godly Susanna*（『最も徳高き篤信のスザンナ』Thomas Garter作、1569年）に「肉欲」が、*The Tide Tarrieth No Man*（『潮時は待ってくれない』George Wapull作、1576年）、『知恵と知識の結婚』に「淫乱」が登場する。モラリティーの枠組みでは、良い愛は信仰に関わるものであり、悪い愛は肉欲に関わるものであったのだ。『三淑女』における「愛」の性格は明確ではない。「愛が、市に、町に、国中に見いだされ，富と平和をもたらし、全能の神を喜ばせますように」と愛は願望を述べる。「愛」は人の心ではなく、コミュニティーに富と平和をもたらす者なのである。信仰のみに関わる神への愛のみではなく、イタリア由来のロマンチックな愛というだけでもなく、肉欲でもない。

(16) *Mundus et Infans*（『現世と幼児』作者不詳、1508年）、*Impatient Poverty*（『いらいらする貧乏』作者不詳、1547年）、*The Conflict of Conscience*（Nathaniel Woodes作、1572年）『良心の葛藤』などのモラリティーでは、悪徳の誘惑からHumanum Genus的な主人公を守るのが「良心」の役割であった。「良心」自らが「悪の道に踏み込まないように」と神に懇願する状況は従来のモラリティーでは到底考えられないことであろう。また、エブリマン的な存在である「単純」が仕えたいと願ったときには、「fool はいらない」と拒否する。これも本来の「良心」の行動原則からはまったく外れるものである。彼女は多くの者が「金銭」に従う時勢に逆らえず「金銭」が提供する金を受け取る。「金銭」が「良心」の顔につける染みは、堕落と汚れを象徴するビジュアルである。

(17) H.S.D. Mithal, *An Edition of Robert Wilson's Three Ladies of London and Three Lords and Three Ladies of Lonodn*, Garland, 1988. p.xxii. なお『三淑女』『三貴族』の引用はすべてこの版によっている。

(18) これに関して従者たちが弁解をしている。「栄華」の従者の「富」は、pompがprideに付き従うもので、ロンドンには有り余るほどであるが，自分の主人の「栄華」はロンドンにふさわしい威風堂々さと、豪華さを表しており、傲慢や虚飾はないのだと説明する。一方「快楽」の従者「意志」は快楽が貪欲からうまれたのではないこと、栄誉ある真っ当な自尊心であると主張する。「政策」の従者「機智」は他の二人から悪い「政策」もいるはずだとからかわれて、自分の主人が仕えているロンドンはキリスト教国であり、悪い「政策」などいないと反論する。また、三人の従者も、お互いに「機智」が悪用されないように、「富」がprideに使われないように、「意志」が導き手を蔑まないようにと、警告するのである。

(19) 擬人化されたロンドンの周りに寓意的人物が配される形式はさまざまなパジェントに登場している。Roy Strong, *The Tudor and Stuart Monarcy II (Elizabethan)*, pp.17-32.

(20) 格言付き標章や題銘に関しては、ロイ・ストロング『ルネサンスの祝祭』第二章「遠く失われた秘儀」に詳しい。

(21) Lancashire, pp.52-54.

(22) Lancashire, pp.171-184.

(23) Lancashire, p.50. p.153.

(24) Of Watches in this City, and other Matters commanded, and the Cause whyの項目には次の記述がある。

on the 8th of May, a great muster was made by the

citizens at the Mile's End, all in bright harness, with coats of white silk, or cloth and chains of old in three great battles, to the number of fifteen thousand, which passed through London to Westminster...

Stowの記述は、この催し物があまりにも大きな負担を市民に負わせたので、その年から1548年までWatchはヘンリーの名によって禁止されたと続く。Watch廃止の理由に関しては、宗教改革によって聖人の日にカトリック色の強い上演を行うことが抑圧されたことと、ロンドン市長をはじめとするロンドン市において力を持った市民の代表が、より世俗的な就任式を行いたかったからだとLancashireは述べている。Lancashire, pp.157-58, pp.160-61.

(25)『ルネサンスの祝祭』第一部、第三章「国家のスペクタクル」(26)

(26) Scott and MacLean, p.33.